

今回はSL(short lecture)通算第38回目。7章の仮想変位，仮想速度と変分の内容を十回にわたって講義している。今回はその三回目として「速度の式から仮想変位を導出する方法」について例題を通して学ぶ。 2023.06.08 清水

[例題7.1] 速度の式からの仮想変位の導出

図4.2において点 P が剛体 B 上に固定されているとすると，点 P の速度は式(5.45)により

$${}^O\vec{v}^P = {}^O\vec{v}^B + \vec{\omega}^{OB} \times \vec{s}^P \quad (7.6)$$

と書けるから，点 P の変位の変分は式(7.1b)を求める手順を参考に式(7.5)から

$$\delta\vec{r}^P = \delta\vec{r}^B + \delta\vec{\theta} \times \vec{s}^P \quad (7.7)$$

と求められる。ただし $\delta\vec{\theta}$ は微小回転の変分である。式(7.6)，式(7.7)はそれぞれ枠 B の成分で表わすとそれぞれ次式となる。

$${}^O\vec{v}^P = {}^O\vec{v}^B + \mathbf{A}^{OB} \tilde{\omega}^{IOB} \mathbf{s}^{IP} \quad (7.8)$$

$$\delta\mathbf{r}^P = \delta\mathbf{r}^B + \mathbf{A}^{OB} \tilde{\delta\theta}^{IOB} \mathbf{s}^{IP} \quad (7.9)$$

ただし ${}^O\vec{v}^P$ ， ${}^O\vec{v}^B$ ， $\delta\mathbf{r}^P$ ， $\delta\mathbf{r}^B$ は枠 O の成分表示ベクトルである。

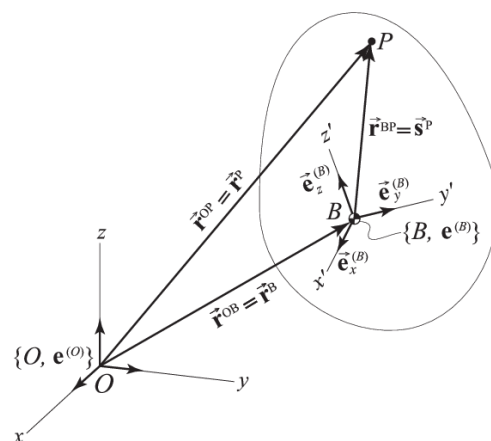


図4.2 物体上の点 P の位置

[補足7.3_1] 式(7.6)から(7.7)の導出についての説明

すでにショートレクチャーSL-36の式(7.2a)の下4行目以降で説明したように

仮想変位は「位置ベクトル \vec{r} の変分は位置ベクトルを解析的に表わし、一般化座標で微分することによって求めるか、 \vec{r} の時間微分を計算し、これにより \vec{r} の時間に対する偏微分と時間に関する陽な式をすべて除き、速度を仮想変位におきかえることにより求める。」後者のやり方に従って、点 P の変位の変分式を求める。

式(7.6)は全体枠 O から見た点 P の速度 ${}^O\vec{v}^P$ である。点 P は剛体 B 上に固定されているから、この速度は剛体 B の速度 ${}^O\vec{v}^B$ とこの剛体 B が全体枠 O に対して $\vec{\omega}^{OB}$ だけ回転していることによって生じる併進速度 $\vec{\omega}^{OB} \times \vec{s}^P$ の和である。この式(7.6)における物理量に対応する変分量は次の式の右側

$$\begin{aligned} {}^O\vec{v}^P &= \frac{{}^O d}{dt}(\vec{r}^P) && \Leftrightarrow \delta\vec{r}^P \\ {}^O\vec{v}^B &= \frac{{}^O d}{dt}(\vec{r}^B) && \Leftrightarrow \delta\vec{r}^B \\ \vec{\omega}^{OB} dt &= d\vec{\theta} && \Leftrightarrow \delta\vec{\theta} dt \end{aligned} \tag{a}$$

であるから

$$\delta\vec{r}^P = \delta\vec{r}^B + \delta\vec{\theta} \times \vec{s}^P \tag{7.7}$$

と書ける。ただし $d\vec{\theta}$ は一つのベクトルであり、回転に関する単位の回転軸ベクトル \vec{n} と、その軸周りの無限小回転 $d\theta$ により $d\vec{\theta} = \vec{n} d\theta$ により定められる。これは軸性ベクトルである。微小回転の変分 $\delta\vec{\theta}$ は、 $\vec{\theta}$ の数学的な変分計算により求められる量ではないので、文字 δ を使わずひとつのベクトルとして $\delta\vec{\theta}$ と、書いている。